

新しい防災気象情報

VOL.21[2026.6]

2026年5月28日午後、気象庁は「新たな防災気象情報」の提供を開始しました。これまで複雑で分かりにくかった河川氾濫や大雨などの情報を、事象（河川氾濫、大雨、土砂災害、高潮）ごとに5段階の警戒レベルに対応させることで、避難のタイミングを判断しやすくなっており、危険度が直感的に把握できるようになりました。気象庁は、レベル4やレベル3の段階での早めの速やかな避難を呼び掛けています。（気象庁HPより：<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/bosai/keiho-update2026/index.html>）

このように気象庁が早めの避難を呼びかける中で、今回は、これまでのPOTEKAやアメダスなどによる竜巻や台風の地上観測実績から、その避難判断の一助となるかもしれない事例をご紹介します。

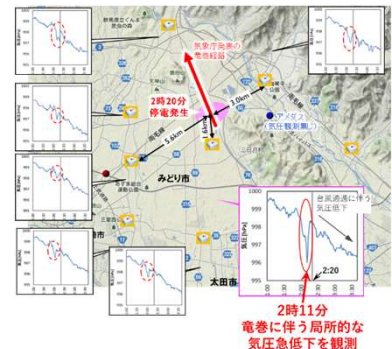
竜巻は台風の進行方向右側の北東象限にて発生しやすいとされます。POTEKAは、日本全国に一様ではなくも、局所的には稠密な地上気象観測網を持ちます。2013年の観測開始から約13年間で、この台風の北東象限に発生した竜巻をピンポイントで観測できた事例もいくつかあります。ここで紹介する3つの竜巻＋台風の観測事例から、ある共通的な観測結果（事象の経過）が見受けられました。

(1) 2013年9月16日2時17分頃に、台風18号マンニーの北東象限に入った群馬県みどり市でF1スケールの竜巻が発生しました。この竜巻によって生じた気圧の急降下を、稠密な観測網により複数地点で捉えたPOTEKA【図1】は注目を集め、NHKの防災番組などでも紹介されました。また、気象庁が特別警報を設定して以降、初めて大雨特別警報が発表されたのが、この台風18号でした。台風18号の中心は、竜巻発生時の約11時間後、発生地域を危険半円側に巻き込みながら、すぐ西隣を通過しました【図2】。

(2) 2019年10月12日8時8分頃、台風19号ハギビスの北東象限に入った千葉県市原市で、JEF1スケールの竜巻が発生しました。この竜巻による気圧降下は、市原市内のPOTEKA観測点などで捉えられています。台風19号の中心は、竜巻発生から約12時間後、発生地域を危険半円側に巻き込みながら西隣を通過しました【図3】。

(3) 2021年9月18日0時4～7分頃に、和歌山県美浜町と御坊市でJEF1スケールの竜巻が発生しました。発生地域は台風14号チャンスーの南東象限でしたが、東進する台風の進路の右側でした。台風14号の中心は、竜巻発生から約7時間後に、発生地域を危険半円側に巻き込みながら、すぐ北隣を通過しました【図4】。

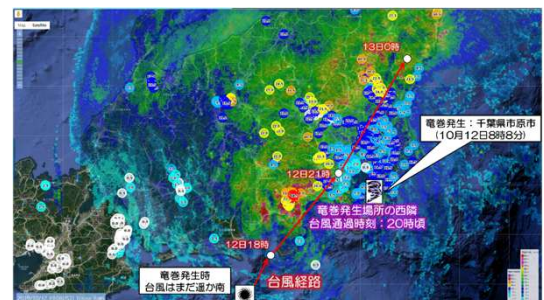
これらの事例から、竜巻発生後おおむね半日以内に、台風の中心が竜巻発生地域を危険半円側に巻き込みながら近くを通る、という共通傾向が見られました。ただし、竜巻を起こす台風がすべてこの経過をたどるわけではなく、竜巻は他の要因でも発生します。避難判断にあたっては、実際の気象情報を十分に確認し、状況に応じた行動を心がけることが重要です。



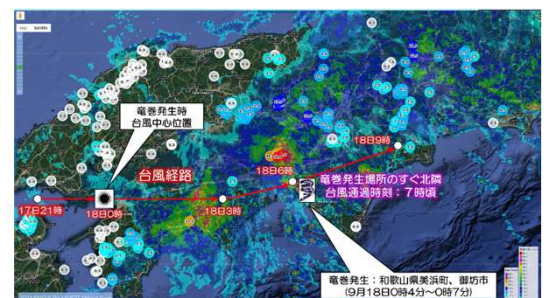
【図1】2013年9月16日POTEKA海面気圧



【図2】2013年台風18号経路図



【図3】2019年10月12日POTEKA NET降水量



【図4】2021年9月18日POTEKA NET降水量